『話す』ことの大切さ

代表取締役社長　安永　暁俊

おかげさまで、本年6月12日をもちまして、当社は東証第一部に指定されました。

この喜びを皆様と分かちあうとともに、これから新しいステージを歩みましょう。

さて、本年7月にサッカーのW杯が開催され、ドイツが圧倒的な強さを示して、4度目となる優勝を果たしました。

今回は、このドイツサッカーを参考にして、当社にとって模範とすべきこと、『話す』ことの大切さについて述べます。

『言語技術』が日本のサッカーを変える

これは、田嶋幸三氏（日本サッカー協会副会長）が書かれた本の題名です。田嶋氏は、日本とドイツ両国での選手とコーチの経験から、強さの秘密を明らかにしています。

それはキックやパスの技術ではなく、言語の技術とのことです。今まで聞いたことのない言葉ですが、『言語の技術』とは『表現力』と『論理力』とを合わせたものです。同時に、それはドイツにあって日本に足りないものと指摘されています。

『表現力』

田嶋氏はドイツと日本両国で、少年にサッカーを教えた時、それを痛感しました。

練習の途中でプレーを止めて、コーチが少年にプレー内容について尋ねました。「どうして球を右前方へ蹴ったのか？」

ドイツの少年は、「そこに味方が多くいたから」などと自分が考えた理由を言います。一方、日本の少年は、「・・・」じっとコーチの眼を見て黙ってしまいます。まるでコーチの眼の中にある正解を探そうとしているかのようです。

この場面で、コーチは少年に正解を求めているわけではなく、どう考えてプレーしたかが知りたいのです。重要なのは、どんな意図を持って球を蹴ったのか、それをハッキリと言葉にして相手に伝えることです。それが表現力となります。

得てして日本人は、答えはひとつしかないと思い込んでしまいます。問いを発した人の答えと違う答えを言ってはいけないのではないか、間違ったことを言うのは恥ずかしい、と思いがちです。

『論理力』

田嶋氏は、ドイツのサッカー少年がいわゆる『バカ蹴り』をしないことにも驚きました。

バカ蹴りとは、コーチが大声で「蹴っとけぇー」と指示し、無意味な大蹴りをすることです。日本では、試合の勝ち負けにこだわるあまり、バカ蹴りを多用しがちです。

だけれども、目的のないキックや本人の意志のないプレーは、選手の育成にはつながりません。

試合中、一回一回考えながら意味があるプレーを100回経験する子供と、無意味なプレーを繰り返す子供とでは、その後の技術やセンスの伸び具合が格段に違ってくるはずです。

意味のあるプレーに自覚的に取り組むことで、プレーを振り返っての反省や、次への気づきにもつながります。

ドイツの少年は、日常生活から論理的に考える癖がついており、それがサッカーのプレーにも活かされていると書かれています。

表現力も論理力もない選手は、スポーツバカになってしまう。根性や体力で勝負すればいい、では世界で勝てない。言語の技術を鍛えていくことが、必ず日本のサッカーの上達につながっていくのだと、田嶋氏は述べています。

ここまで読んで、皆さんどう感じましたか？

私は、この本からヒントを得て、『話す』ために必要な表現力と論理力を、安永の日常業務にも取り入れてみようと考えました。

『表現力』が安永を変える

職場での表現力とは、黙って過ごさずに、その場で自分の考えを『話す』ことです。

工場でも事務所でも、何人か集まって会議をする場面が多くあります。その時に、黙ったまま傍観してしまうのではなく、自分の意見や疑問を少し言葉に出してみる。

私自身も経験ありますが、恥ずかしながらも一言でも発すると、心に変化が起きます。自分の存在をアピールするというか、意識の中に自分が出てきて、「これは自分のもの（仕事）だ」と感じ始めます。自分の仕事なら、あれこれ考え出す。すると仕事が面白くなる。自分を表現することは楽しいことです。

職場で上司から質問を受けた時も、サッカー少年のように、上司の眼の中に答えを探してはいけません。

サッカーの試合中どの方向へ蹴るのか、正解はひとつではありません。仕事も同様です。

中には、安全行動のように、こうすべきという絶対的な答えがある場合もあります。先輩たちがあれこれ試行錯誤する中で、これが最善な行動だと定めてきた結果です。初めから答えがひとつだったわけではありません。

2011年9月号『管理職の考えや判断は、まずは部下の考えを聞いてからルール』と、2012年9月号『聴くことの大切さ』を皆さんにお願いしました。

上司の質問に対して、複数ある答えから自分が思う正解を相手にぶつけてください。間違ったらどうしようと恐れず緊張せず、自分で考えたことを言葉に出してください。

『論理力』が安永を変える

職場での論理力とは、仕事の一つひとつにこだわりを持つことです。それが『話す』言葉となって出てきます。

工場でも事務所でも、作業標準や業務マニュアルがあふれています。それに従って動けば、一通りの業務はとりあえず完了します。上司から指示された仕事を、あれこれ余計なことを考えずに、手だけ動かして片付けようとしがちです。

だけれども、毎日繰り返す日常業務において、仕事の一つひとつの意義や目的を考えることはとても大事なことです。

作業標準や業務マニュアルに書いてある基本動作の一つひとつのことを、「なんでだろう？」と疑問を持ち、自分なりに考えていくと、そこに書かれた理由や背景が見えてきます。仕事に対して、自分なりに答えを考え納得していくと、そこに興味が出たり工夫が出てきます。つまり自分らしさが出てきます。自分らしさが出てくると、仕事が面白くなる。

仕事始めに、その意義や目的をじっくり考えることは、時間をかけ過ぎている様に見えて、実はその方が後々仕事がはかどります。

問題が起きた時の真因追求に、なぜなぜ分析をよく使います。「なぜ？」を5回繰り返して原因の原因を、自分なりに深く考え抜く。そのためには、自分の仕事を初歩的な所から理解して、難解な所まで理解を積み上げていく必要があります。

仕事始めに時間をかけて理解する方が、『急がば回れ』の結果となるのではないでしょうか。

自分で納得することなく、ただなんとなく曖昧に作業してしまう、それを5年10年と続けてしまうのはもったいないと感じます。

『話す』ことの大切さ

私自身、あうんの呼吸や相手への思いやりといった日本の文化は素晴らしいものだと思います。大切にしていきたいことです。仲間とのアイコンタクトや皮膚感覚のコミュニケーションにもつながります。ただし、それだけでは足りません。

困難な状況や変革の状況に直面した時、現状を打破していく雰囲気を作るには、お互いに筋の通った考えをぶつけ合って、言葉で励まし高めあう必要が出てきます。

『以心伝心』の良き文化の上に、『話す』ことを意識して取り入れていく。それが安永をワールドクラスへと導いてくれると信じます。

今回紹介した本は、MS塾、PM塾で取り上げ、管理監督者190名が読んで学んできました。皆さんがのびのびとプレーできる環境は整っています。さあ、キックオフです！

（参考文献）言語技術が日本のサッカーを変える　田嶋幸三著